

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 10 月 6 日現在

機関番号：62618

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25580103

研究課題名(和文)新規言語事象の集中的多角的調査による首都圏の言語状況の把握

研究課題名(英文)The Current States and Changes of the language in the Tokyo Metropolitan Area

研究代表者

三井 はるみ(MITSUI, Harumi)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・理論・構造研究系・助教

研究者番号：50219672

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：(1)東京都立川市において、高年層を対象に面接調査を行った。その結果の一部について市歴史民俗資料館講演会で報告した。

(2)携帯電話を利用した言語調査システム(RMS)を改良し、首都圏若年層高密度分布調査を実施した。このうち言語意識に関する項目について分析を行い論文として発表した。

(3)首都圏の言語に関する網羅的な研究文献目録を作成し、吉田雅子・三樹陽介『首都圏の言語に関する研究文献目録(稿)』として刊行した。

研究成果の概要(英文)：(1) We performed some interview surveys targeted for the aged people in Tachikawa-city, Tokyo. I reported on the part of the result in the lecture at the Tachikawa-city reference library of history and folklore.

(2) We improved the language investigation system that a cellular phone was used. And metropolitan area younger age group high-density distribution investigation was put into effect. Among these it was analyzed about the item about the linguistic consciousness and it was announced as a thesis.

(3) We made a comprehensive research literature catalog about the language in the Tokyo Metropolitan Area. It was issued as Masako Yoshida and Miki Yousuke "research literature catalog about the language in the Tokyo Metropolitan Area".

研究分野：日本語学

キーワード：東京都市圏 実態と動向 体系と変化 方言と共通語 東京のことはば 地理的構造 社会的地域差

1. 研究開始当初の背景

首都圏の言語は、標準日本語の基盤方言として、またこの地域で発生した新規言語事象がほどなく全国に波及する強い発信力をもった地域言語として、独自の位置を占めている。しかしその重要性に比して研究は活発とは言えない。情報量が多く流動性が高く社会的多様性が多岐にわたるといふ大都市特有の地域の性格のため、言語生活、言語意識を含めた地域言語の全体像を見渡すことが難しく、変化要因は複雑で方向性もつかみにくいことが、その一因と考えられる。

このような首都圏の言語の実態と動向を解明するためには、現在発生し変化が進行しつつある言語事象を的確にとらえ、その使用状況を言語意識とともに精査することが有効である。これにより、変化の方向を推定するとともに、首都圏内で新規言語事象を生み出しやすい地域を特定したり、広がり方のルートを明らかにしたりすることも可能になる。このような実践に、主として1990年代の調査データに基づく、田中ゆかり(2010)『首都圏における言語動態の研究』(笠間書院)があるが、首都圏の言語状況はその後さらに多様化に向かっていると思われる。

研究代表者と研究分担者の計5名は、「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」(国立国語研究所萌芽・発掘型共同研究プロジェクト、プロジェクトリーダー：三井はるみ、2010年11月～2014年3月)のテーマで共同研究を行った。この研究では、(1)首都圏における新たな言語事象、言語状況の報告・発見、(2)携帯電話を利用した言語調査システム(RMS)を開発し、首都圏若年層における新たな言語分布を見出す、といった成果が得られた。

本研究は、この先行プロジェクトから得られた知見をもとに、現在の首都圏の言語状況を精査し、その実態と動向に関するモデルを見出していくために計画されたものである。

2. 研究の目的

首都圏の言語の実態と動向を解明するためには、現在発生し変化が進行しつつある言語事象を的確にとらえ、その使用状況を言語意識とともに精査することが有効である。本研究では、首都圏の地域言語に近年生じている言語現象、言語状況について、(1)首都圏内の特定地域における集中的多角的調査、(2)携帯電話を利用した言語調査システム(RMS)による首都圏若年層高密度分布調査を行い、その分析をとおして、現在の首都圏の言語の実態と動向に関するモデルを見出すことを目的とする。

3. 研究の方法

新規言語事象の使用状況を中心として、次の調査を実施した。(1)東京都立川市における集中的多角的言語調査。(2)RMS(Real-time Mobile Survey System)の改良、

および、これによる首都圏若年層高密度分布調査。以上の調査結果を、使用状況、言語意識、話者属性、地理的分布、地域属性等の面から精査し、それに基づいて、現在の首都圏の言語の実態と動向を記述するためのモデルの構築を試みた。

また研究の基盤整備として、首都圏の言語に関する網羅的な研究文献目録である、吉田雅子・三樹陽介『首都圏の言語に関する研究文献目録(稿)』を作成した。

4. 研究成果

ここでは、首都圏若年層の言語状況のうち、方言使用をめぐる言語摩擦の事例に着目し、その背後にある方言意識との関係を探ることを目的として実施した調査研究の結果を報告する。

(1) 方言への評価の高まり

現代は、全国的に、伝統的方言が衰退し、共通語が浸透するのと裏腹に、方言そのものや方言を使用することへの評価は高まっているとされる。とりわけ首都圏若年層の間では、「自分には方言がない」という認識のもと、方言に対してあこがれを抱いたり、各地の方言語彙や文末表現を新鮮なものと受け止め、くだけたスタイルの話し言葉の中に取り入れることが広く見受けられる。「方言コスプレ」(田中 2011)と名付けられるこのような現象は、方言一般や個々の表現を何らかの意味で「価値あるもの」と捉える評価意識に支えられていると考えられる。これは、明治から昭和の高度経済成長期まで続いた、方言および方言使用への極端なマイナス評価とは、大きく方向性を異にするように見える。

(2) 首都圏若年層における方言使用に起因する言語摩擦の現状

それでは、方言へのマイナス評価が改善された結果、かつて「方言コンプレックス」と言われたような、方言使用に起因するトラブルや話者の鬱屈は解消されたのだろうか。特に、高度経済成長期の大量の人口移入の中で、方言による言語摩擦が多く生じた首都圏の現状はどのようなのだろうか。

我々の予備的なアンケート調査によると、現在においても、首都圏の大学に通う非首都圏出身者からは「方言使用に関して困ったこと」として多くの事例が報告されている。それらは大きく次の2種類に分類される。

- ① 友人たちに方言をたびたび指摘されるので、人前で方言を使わないように気をつけている。(指摘型)
- ② 友人たちに方言を話すようせがまれて困った。「なまってなまって」と言ってくる人もいる。(せがみ型)

①はかつての「方言コンプレックス」に近いタイプ。②は方言への「好感」を背景とした働きかけによって不快を感じるタイプである。特に②は、方言への好意的評価もまた、

言語摩擦を引き起こす背景となっているという点で、これまで指摘されていた事例と異なり注目される。

(3) 方言使用に起因する言語摩擦の背景にある方言意識

このように、方言使用に起因する言語摩擦の背景は、単に方言に対する「プラス評価／マイナス評価」という軸だけでは捉えきれない。そこで本研究ではまず、方言使用に影響すると考えられる方言意識を9種類設定した。対象(I方言そのもの, II一般的な方言使用, III自身の方言使用)×観点(i定義／認識, ii評価／志向, iii規範／行動)の掛け合わせによる9種類である。この中から方言使用に起因する言語摩擦に比較的直接関係すると思われる4種類について、首都圏所在の大学に在籍する大学生を対象にアンケート調査を行った。

(4) 調査の概要

調査文と選択肢は以下のとおりである。

問 1 自分の話すことばは何だと思えますか。〈自身の使用方言の認識〉

- a. 標準語 b. 共通語 c. 東京方言
- d. 関東方言 e. その他 (自由記述)

問 2 人と話すときに方言が出ることを気にした方がよいと思えますか。〈方言使用の規範〉

- a. 気にせず方言のまま話せばよい
- b. なるべく共通語になおした方がよい
- c. 場合による

問 3 あなたは人と話すときに方言が出ることを気にしていますか。〈方言選択行動〉

- a. 気にせず方言のまま話す
- b. 共通語になおすようにする
- c. 場合による d. 方言は話せない

問 4 方言が使えたらいいと思えますか。〈方言志向〉

- a. すでに使える
- b. 使えるようになりたい
- c. 使えるようになりたいとは思わない

調査時期は2012年6月から2015年6月。対象者は首都圏の大学に通学する大学生で、有効回答者数は938名である。調査と集計、結果の地図化には、鍵水兼貴氏が開発したReal-time Mobile Survey System (RMS) を利用した。

(5) 分析の方法

有効回答のうち、関東地方出身者773名分の回答を分析対象とした。回答者の80%以上が関東地方の出身者であり、かつ、予備的調査の回答傾向から、首都圏における方言使用に起因する言語摩擦の多くが、首都圏(おおむね南関東1都3県:埼玉県, 千葉県, 東京都, 神奈川県)出身者と、北関東(茨城県, 栃木県, 群馬県)出身者との間で生じていると推測されたためである。

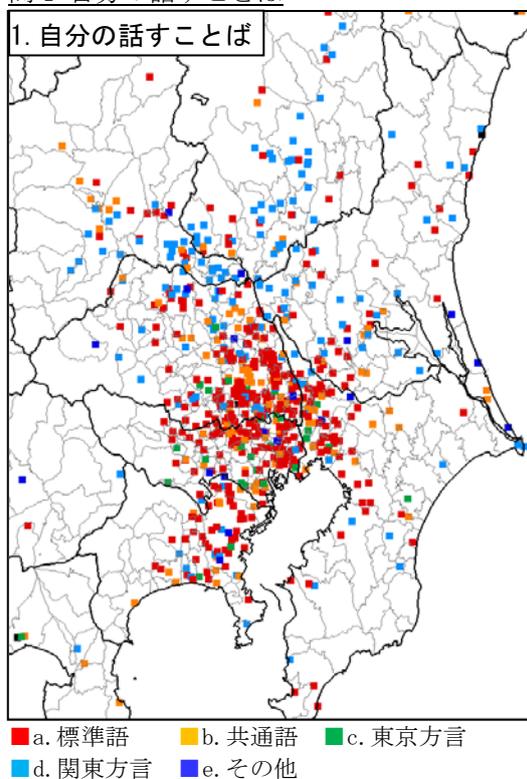
携帯メールまたはアンケート用紙によっ

て回収した回答を地域別に集計し、併せて、地理的分布を詳細に把握するために、回答者の出身地地点(5歳から15歳までの間に最も長く居住した場所, 大字単位)に回答をプロットして言語地図を作成した。方言に対する意識は、日常生活の中で「方言らしい方言」と接する機会がどの程度あるか等の言語環境に大きく左右される。そのような環境は、関東地方内部、首都圏内部でも、地理的条件によって異なる。そこで、状況をつぶさに把握するために、言語地理学的手法を用いることにした。

(6) 調査結果

各設問に対する回答を分布地図の形で示し、集計結果の数値を参照しながら、傾向を解説する。

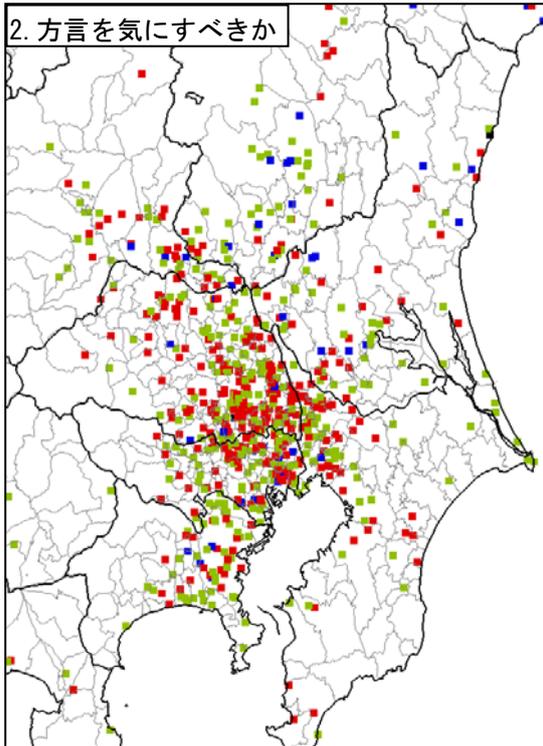
問 1 自分の話すことば



全体として「■標準語(55.2%)」「■共通語(16.4%)」という回答が多い。特に首都圏(南関東1都3県)では圧倒的である。東京都23区南西部では「■東京方言」も目立つ(東京都23区南西部の24.1%)。一方、首都圏の外周部、特に北関東3県では「■関東方言」が多い(茨城県40.8%, 栃木県66.7%, 群馬県55.1%)。使用言語意識の上で、「首都圏」と「北関東」の間には大きな違いがある。(以下では、「標準語」と「共通語」をまとめて「共通語」とする)

問 2 方言を気にすべきか

全体として「■気にせず方言のまま話せばよい」(45.7%)という方言使用に肯定的な意見と、「■場合による」(48.2%)という中



- a. 気にせず方言のまま話せばよい
- b. なるべく共通語になおした方がよい
- c. 場合による

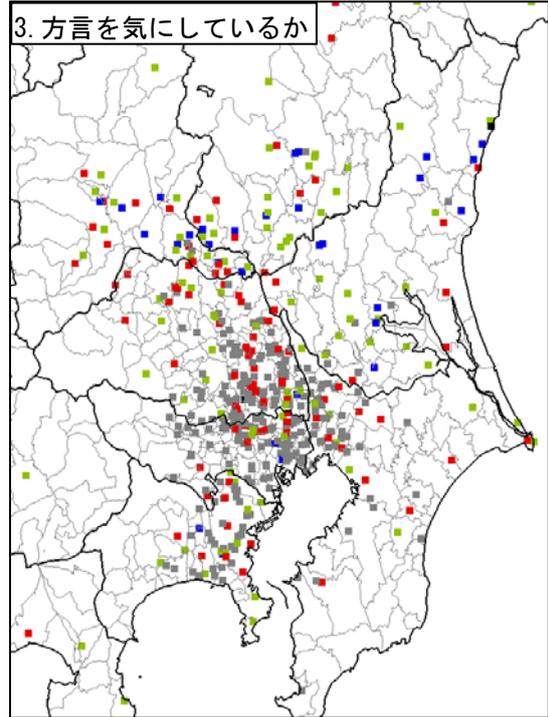
立的意見が相半ばしている。多くの地域で後者が前者を上回っているが、首都圏北部（埼玉県から東京都 23 区北東部にかけての地域）では肯定的意見が多数を占めており（埼玉県 56.8%, 23 区北東部 50.7%）、傾向が異なる。「■ b なるべく共通語になおした方がよい」（全体で 5.8%）という否定的意見は、少数意見ではあるものの、茨城県・栃木県を中心に、一定数見られる（茨城県 12.3%, 栃木県 15.9%）。

問3 方言を気にしているか

問2では規範意識を尋ねたのに対し、問3は実際の選択行動に関する質問である。方言を使用しないと意識している場合は回答できないので、「■ d 方言は話せない」という選択肢を設けた。首都圏ではこれが最も優勢である（東京都 23 区では 75.4%）。問1で「標準語」「共通語」という回答が多かったことと一致する。

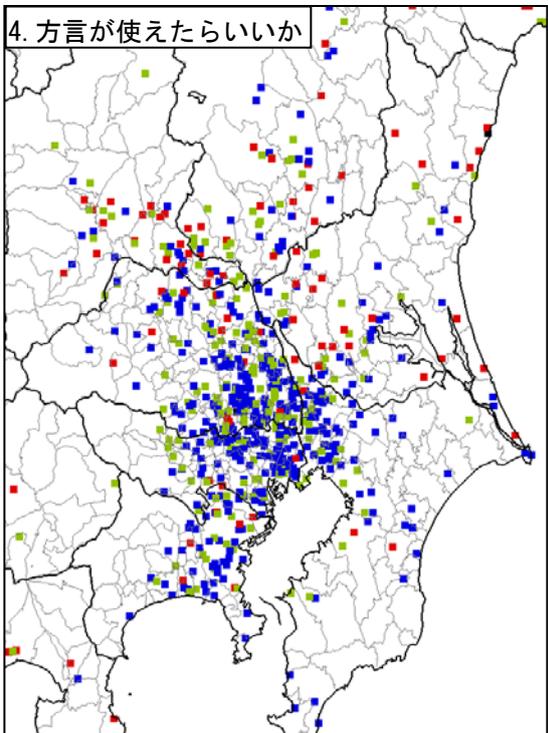
それを除くと、全体としては、「■ a 気にせず方言のまま話す」（19.7%）という方言使用に対する肯定的態度と、「■ c 場合による」（18.5%）という中立的態度が相半ばする。一方「■ b 共通語になおすようにする」（6.3%）という否定的態度は、全体では少数であるが、北関東では目立つ（茨城県 25%, 群馬県 22.9%, 栃木県 20.5%）。ただし群馬県は、埼玉県北部とともに肯定的態度も多い（群馬県 37.1%, 埼玉県北部 40.6%）。群馬県方言は、茨城県・栃木県方言と違って、東京式アクセントを有するなど西関東方言に属する。このことが方言意識の面でも違いを生み出

している可能性がある。



- a. 気にせず方言のまま話す
- b. 共通語になおすようにする
- c. 場合による
- d. 方言は話せない

問4 方言が使えたらいいか



- a. すでに使える
- b. 使えるようになりたい
- c. 使えるようになりたいとは思わない

問4は、方言への志向意識に関する質問である。問3とは逆に、日常的に方言を使用し

ていると意識している人は該当しないので、「**■a.**すでに使える」という選択肢を設けた。これは北関東3県に多い(茨城県32.4%、栃木県28.6%、群馬県38.8%)。問1で「関東方言」という回答が多かったことと一致する。

それを除くと、全体として「**■b.**使えるようになりたい」(58.7%)という積極的志向が過半数を占め、「**■c.**使えるようになりたいとは思わない」(29.1%)という消極的志向を上回る。北関東では消極的志向の割合が高く、両者ほぼ同数である。首都圏内部では、首都圏北部(埼玉県から東京都23区北東部にかけての地域)に消極的志向がやや多い傾向がうかがわれる。

(7) 関東地方における方言意識の地域差と言語摩擦の発生

以上の結果から、言語摩擦に関わると思われる4種の方言意識に関して、関東地方内部に地域差が存在することがわかった。首都圏と北関東の間で大きく異なり、次いで、首都圏内部にも南北の違いがある。各地域に見られる特徴的な点をパターン化してまとめると、表1のようになる(当該地域の大多数の人の持っている意識、ということでは必ずしもない点に留意)。

表1 関東地方における方言意識の地域差

| | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 |
|-------|------|------|------|------|
| | 使用方言 | 使用規範 | 選択行動 | 方言志向 |
| 北関東 | 関東方言 | 否定的 | 抑制 | 既使用 |
| 首都圏北部 | 共通語 | 肯定的 | 話せない | 低い |
| 首都圏南部 | 共通語 | 中立的 | 話せない | 高い |

北関東出身者の約半数は、自身の使用言語を共通語と異なる「関東方言」と自認している。人と話すときに方言が出ることについては、否定的な意見が1割強見られ、実際方言使用を抑制する人は4分の1を占める。方言を使わないと自認する人の方言志向も高くない。全体として北関東出身者の自方言への評価は低い。このような意識が形成された背景については別途検討が必要であるが、現時点では、低い自方言評価意識が、方言使用による言語摩擦の素地にあると見なされる。

首都圏出身者は、大半が、自身の使用言語は共通語であり方言は話せないと自認している。使用規範意識と方言志向意識には南北差がうかがわれる。

首都圏北部(埼玉県から東京都23区北東部・千葉県北西部にかけての地域)出身者は、使用に関して「気にせず方言のまま話せばよい」という肯定的意見が多数を占める一方、「使えるようになりたい」という志向は高くない。「自分は方言は話せないし、話せるようになりたいとは思わない。しかし人は人前で気にせず方言のまま話せばよい」という態度である。首都圏北部は北関東と地理的に接触しており、人的接触も日常的に生じていると思われる。北関東出身者の話す方言に触れ、

ある程度の実像を知り、共通語との具体的な違いに気づくこともあるだろう。方言志向は低いが他者の方言使用は許容する、という意識は、このような地域環境から生じたものと推測される。また、そのような中では、人の方言に気づいて、特に直してやろうというような意図なく、話題にすることもあろう。しかしそのような働きかけは、場合によって〈指摘型〉の言語摩擦を引き起こすきっかけになりうる。

首都圏南部(東京都23区南西部から多摩地区・神奈川県にかけての地域)出身者は、使用に関して「人と話すときに方言が出ることを気にした方がよいかどうかは場合による」という中立的意見が多数を占める一方、「使えるようになりたい」という志向は高い。「自分は方言を話せないが話せるようになりたい。人が方言で話すことを気にすべきかどうかは場合による」という態度である。首都圏南部は北部と異なり、「方言らしい方言」と接触することの少ない地理的位置にある。そのような環境では、「方言」というものが、日常生活から離れたいわば「バーチャル」な存在と捉えられやすい。方言の実像を知らないまま「あこがれ」のような肯定的評価を持つことさえありうる。これは〈せがみ型〉の言語摩擦を生じうる環境と言えよう。

実際に〈指摘型〉〈せがみ型〉の言語摩擦が首都圏の中で地理的偏りを持って発生しているかどうかは現時点では不明である。しかし、方言使用の規範意識が肯定的であっても中立的であっても、方言志向意識が高くても低くても、方言使用に起因する言語摩擦は生じうる、ということに目を向け、そこから言語摩擦発生の構造の類型を見出すことは有効であろう。

(8) 方言の社会的地位の変化と言語摩擦発生の構造

首都圏における方言使用に起因する言語摩擦は、かつては、方言および方言使用に対する極端なマイナス評価から生じていた。あからさまな「方言矯正の強要」「嘲笑」等である。しかし、方言の社会的地位の上昇に伴い、首都圏出身者は、少なくとも自覚できる意識のレベルでは、方言への評価をプラスに転換させた。しかし言語摩擦は完全には解消されず、今度は、〈指摘型〉〈せがみ型〉等の形で現れている。

図1は、言語摩擦の構造について、かつてと現在を対比して図示したものである。

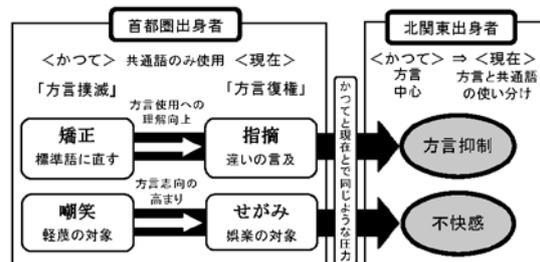


図1 方言使用に起因する言語摩擦の構造

〈指摘型〉の働きかけには、かつてのような「矯正」の意図はない。しかし方言使用者にとっては「指摘」が方言使用抑制の圧力になっている。また、〈せがみ型〉の働きかけは、方言への評価が逆転しているにもかかわらず、興味の強さが、かえって方言を物珍しい異質なものとして見ているということを露呈している。その点で、方言使用者に対して、かつての「嘲笑」と同じ効果を与えてしまっている。

つまり、共通語しか話せない（と自認している）首都圏出身者からの発信は、方言への理解や興味によって、かつてよりプラスのメッセージになってはいる。しかし方言使用者にとっては、かつてとあまり変わらないマイナスのメッセージとして受け止められているのだと思われる。

(9) おわりに

今後は、言語摩擦のケースの把握を進めるとともに、方言意識の地域差と言語摩擦の構造との関係についてより精緻に分析を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 鎌水兼貴・三井はるみ（印刷中）「首都圏在住者の方言話者への評価意識」宇佐美洋編『評価を持って街に出よう』くろしお出版、査読無
- ② 三井はるみ（印刷中）「首都圏のことば」井上史雄・木部暢子編『はじめて学ぶ方言学』ミネルヴァ書房、査読無
- ③ 久野マリ子（2014）「首都圏方言の拡散と共通語化」『首都圏方言の研究』5, pp. 1-8, 査読有
- ④ 田中ゆかり（2014）「「方言」が価値を持つ時代—Stigma から Prestige, そして…—」『都市問題』105(8), pp. 9-17, 査読無

〔図書〕（計1件）

- ① 田中ゆかり編（2015）『日本のことばシリーズ14 神奈川県のことば』明治書院, p. 256
- ② 吉田雅子・三樹陽介（2014）『首都圏の言語に関する研究文献目録（稿）』JSPS 科研費挑戦的萌芽研究 25580103 研究成果報告書, p. 94

〔その他〕

○講演
三井はるみ「立川の方言の現在」立川市歴史民俗博物館講演会, 2014年11月16日, 立川市女性総合センター・AIM（東京都立川市）

○座談会

岩橋清美・久野マリ子・シュテファン=カイザー・御園生保子・三井はるみ・諸星美智直（2014）「〔座談会〕江戸語・東京語から首都圏方言へ」『國學院雑誌』115(2), pp. 43-68

○ホームページ

「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」
<http://pj.ninjal.ac.jp/shutoken/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三井 はるみ (MITSUI, Harumi)
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・理論・構造研究系・助教
研究者番号：50219672

(2) 研究分担者

亀田 裕見 (KAMEDA, Hiromi)
文教大学・文学部・准教授
研究者番号：20286024

鎌水 兼貴 (YARIMIZU, Kanetaka)
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・時空間変異研究系・プロジェクト非常勤研究員
研究者番号：20415615

田中 ゆかり (TANAKA, Yukari)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：40305503

久野 マリ子 (KUNO, Mariko)
國學院大學・文学部・教授
研究者番号：90170018